

令和7年2月吉日

世田谷区立喜多見小学校

校長 森田 賢様

世田谷区立喜多見小学校

学校関係者評価委員会

委員長 坂本 雅則

令和6年度 学校関係者評価 報告書

新型コロナウイルスの苦難を乗り越えて、新たな時代に合わせて学校行事も戻ってきました。

しかし地球暖化の影響による異常気象の年となり、児童の健康を守り安全な学校生活を送れるよう日々ご尽力いただいた先生方へ厚く御礼申し上げます。

本年度の学校関係者評価結果を下記の通りとりまとめましたので、ご報告します。

今回の学校関係者評価結果を学校運営にご活用いただき、喜多見小学校が一層発展されることを期待いたします。

<学校関係者評価とは>

保護者、地域住民等の学校関係者などにより構成された学校関係者委員会が行う評価を言います。

目的・学校として組織的・継続的な改善を図ること。

- ・学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ・学校の教育の質の向上に努めること。

令和6年10月に児童、全児童保護者、及び地域の皆さんにご協力いただき実施された「学校関係者評価アンケート」の調査集計結果及び学校より提出いただいた「自己評価報告書」「重点目標の自己点検」、あわせて教員の方々からのヒアリングをもとに、時代の変化や喜多見の地域性を考慮し分析・評価を行いました。アンケートはWEB上で行われ、回収率は約50%でした。

<令和6年度 評価委員会総括>

【評価の高かった項目】

3年間継続して行っている校内研究や「人権」「子どもの心情に沿い寄りながら」という教員が生徒との関わりの中で大切にしている部分の成果が、肯定的な回答に繋がった。

児童保護者共に、学校生活や行事、教員、学習指導に関する項目では肯定的な意見が多く、学校に対する満足感・達成感を多く得られている。学校全体の雰囲気がより一層よくなっていることが日々の様子からも伝わり、日々の先生方の取り組みの成果と感じられる。

【わからないという回答が多かった項目】

全体的にキャリア教育、学び舎、学校内の協議会や運営委員会等の情報面で「わからない」という項目が目立つ。

職業だけでなく、自分を見つめること自体がキャリア教育としているが、児童にその都度の活動を「キャリア教育」という言葉では伝えないため、家庭での会話などでもキャリア教育という言葉が出ず、保護者が理解できていない可能性がある。

区の掲げていることが浸透していない印象を受ける。実際には学校で様々な活動が行われおり、学校便りを通じて発信もしている。浸透させていくためにも、区や学校からの発信を繰り返し続けていくことが必要であると考える。

特に喜多見は就労率の高い時代の中でも、保護者会や学校行事への保護者の参加も多く、保護者の学校への興味が高い地域である。その参加率や興味をうまく活用して、浸透しにくい面を広めていける工夫をしていくことができるのではないかだろうか。また、時代のニーズに合わせ、研修会や講演会等に実際に参加できない保護者を対象に、配信などの工夫も行われており、そういういった工夫が、今後の浸透に伝わっていくことを期待したい。

【学習面 家庭学習や通塾について】

喜多見の地域は、通塾率が低いのが例年の結果である。この設問は、塾に通っているという行動を示すことと、塾で意欲的に学習しているか、という2つの捉え方が考えられる。通塾率が低いのは悪いことなのだろうか。本来であれば家庭学習を身につけさせたい。クラスにより宿題の出し方や量には差があるが、児童の宿題の提出率は悪くなく、与えられた課題はしっかりと行えている。自由課題になると取りくむ児童にバラつきが出てしまう状況である。

「勉強させる」という親の意識が周りの地域に比べて低く、学区近辺に塾が少ないという環境も地域の特性が出ている。「家庭学習」と言わされたときに勉強のみを捉えがちだが、喜多見は他の習い事やスポーツに力を入れている家庭も多く、勉強だけでなく様々な経験から培っていたものが将来に繋がり、その一つ一つが「家庭学習」ともいえるだろう。また「家庭学習をできていない」いう回答において、児童の中では学童や児童館等、家庭以外の親の目の届かないところで学習をしている児童もいるため、回答者各々の項目の捉え方が回答結果に影響していることも考えられる。

世田谷区を目指しているのは、「主体的な学習」であり、課題にぶつかったときの乗り越える力などを学んでいくことも主体的な学びに繋がる。一般的な学力の定着とともに、喜多見の特性を踏まえた様々な主体的な力を身に着けていけるような関わりや指導を、学校や家庭や地域で連携して行っていくことが理想と考える。

【タブレットについて】

タブレットの「ルールが守っていない」という意見は多かったが、昨年よりは数パーセントの減少はみられており、引き続きルールを徹底して声かけしていくことで、さらなる改善に繋がることを望む。

【喜多見独自項目について】

喜多見の独自項目として出している労作や読書に関して、例年否定的な意見が多く、評価委員会で事前に話し合い、今回は設問の語句について工夫をした。

労作に関しては「育てるのが好き」→「育つとうれしい」と変えたことにより、肯定的な回答が増え、これは労作に対して好き嫌いとは関係なく、子どもたちが興味を持ち取り組んでいることを表している。

読書に対しても、例年同様に否定的な回答が多いが改善傾向はみられており、本へ興味を持つことで文の理解度へも繋がることが考えられ、引き続き本と親しめる活動を取り入れていくことを期待する。

【区に望むこと】

設問の項目にそれぞれの捉え方ができてしまう。中学では項目の補足説明のプリントが配布されているようだが、親の認識や理解度の差を埋めるためにも、区からの項目の補足説明が必要と考える。

【まとめ】

喜多見のアンケート結果には、例年と同じく地域の特性がよく表れている。他地域とは教育の意識や考え方方が違うからこそ、学び舎としての連携教育がより増えていくことを期待したい。

今後も喜多見の特性を生かしたより良い教育活動や学校生活が送れるよう、アンケート結果と議論を生かして当委員会としてもサポートしていく。